

## 聖所で神をほめたたえよ

(詩篇150・1～6)

### 一、詩篇150篇をめぐって

第150篇は、詩篇を締め括る詩篇です。

詩篇には、詩篇を編集した人がいました。だれであるのかは分かりません。少なくとも、第二神殿時代です。と言いますのは、3節より5節に「角笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ……」とあるからです。楽器を用いて主をほめたたえるのは、第二神殿時代の礼拝のスタイルです。第150篇が詩篇を締め括る詩篇であるなり、詩篇という五巻から成る詩篇には、始まりとなる、あるいは表紙となる詩篇を置いたはずです。それが第1篇と第2篇です。詩篇が150篇になる前は、第2篇が始めに置かれていたとする説もあります。詩篇が150篇になった時に、第1篇を最初に置いたとする説です。第1篇は、律法(トーラー)の大切さを歌う詩篇です。第2篇は、主に油を注がれた王(メシア)を贊える内容です。第1篇、第2篇が「表紙」であったとするなり、詩篇の本文は第3篇から始まることになります。第3篇以降は「ダビデの祈り」が置かれています。「こうして「ダビデの祈り」は第72篇まで続き、72篇の終わりに「エッサイの子ダビデの祈りは終わった」とい

うことばかり、第一巻が終わります。73篇から第三巻が始まります。第二巻は、アサフの祈りと賛美が收められ、第90篇から第四巻が始まりますが、徐々にその基調は賛美が多くなり、第107篇以降の第五巻は、ほとんどが賛美です。ということは、詩篇の最終的な編集者は「詩篇は、祈りから始まり、賛美に終わる」という考え方を持つて、編集したことがあります。「これはそのまま、私の生活には苦しい」ともたくさんあります。ですが、最終的には賛美で終わりますので、そのように受け止めてください。

### 二、第150篇に聞く

1節を見てまいります。「ハレルヤ。神の聖所で、神をほめたたえよ。御力の大空で、神をほめたたえよ。」1行目の「ハレルヤ」は、146篇から続く「ハレルヤ」という出だしのことばですが、意味は「主をほめたたえよ」です。2行目、「神の聖所で、神をほめたたえよ。御力の大空で、神をほめたたえよ。」とあります。「神の聖所」は、主がモーセに幕屋を造るように指示された時から、始まります。祭司たちが、お務めをする場所です。聖所の奥には至聖所という、もっとも聖なる部屋があつて至聖所と聖所は垂れ幕で仕切られていきました。この形は、紀元70年に、ユダヤ戦争により、ローマ軍によって

破壊されるまで続きました。「神の聖所」を私共に適用するなら、何に当てはまるでしょうか。一つは、キリストを信じる私共一人ひとりです(「コリント3・16」)。もう一つは、キリストの名によつて集まる所、すなわち教会です(マタイ18・20)。私はもう一つ加えて構わないと思います。それは、礼拝堂です。礼拝堂は神に礼拝を献げるための場所です。「神の聖所で、神をほめたたえよ」は、教会という、主イエス・キリストによって呼び集められた集会において、神をほめたたえることです。では、3行目の「御力の大空で、神をほめたたえよ」は、どのように理解したら良いのでしょうか。「大空」は元々、聖なる神の御住まいと考えられていました。紀元前2世紀ぐらいから、大空には悪魔も暗躍していると受け止められるようになり、エベソ書6章のような聖句も出てまいりましたが、「元々は神の御住まいです。詩篇68篇に「力を神に帰せよ。威光はイスラエルの上に、御力は雲の中にある。」とあります。

こうして、主をほめたたえることは続いて行きます。2節です。「その大能のみわざのゆえに、神をほめたたえよ。その比類なき偉大さに、ふさわしく神をほめたたえよ。」と。3節より5節を見てまいります。「角笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ。」と。ユダヤ戦争により、ローマ軍によって

よ。タンバリンと踊りをもつて、神をほめたたえよ。弦をかき鳴らし笛を吹いて、神をほめたたえよ。音の高いシンバルで、神をほめたたえよ。鳴り響くシンバルで、神をほめたたえよ。」とあります。何やらとてもぎやかな礼拝と言いましょうか、騒がしい礼拝にも見えます。それは、主をほめたたえることの表現ですから。様々であつてかまわないと思います。詩篇62篇のようないい處もあります。そういうわけで、詩篇150篇に書かれているからと言って、そのまま真似をするのは、知恵のないことです。

最後に6節です。「息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ。」とあります。「息のあるもの」とは、主が造られたいのちのある生き物です。詩篇150篇に書かれているからと言って、そのまま真似をするのは、知恵のないことです。

### 三、私たちにできること

私共が神にできることは何でしょうか。それは、「主をほめたたえる」とです。詩篇51篇にも書かれています。「まさに私が供えてもあなたはいけにえを喜ばれず、全焼のさしげ物を望まれません。神へのいけにえは碎かれた靈打たれ、碎かれた心。神よ、あなたはそれを蔑まれません。」と。主から柔らかい心をいただいて、主をほめたたえる者とされようではありませんか。